Osaka University Knowledge Archive

Title	開かれたテクストへ : 刊本『文反古』への変容
Author(s)	飯倉, 洋一
Citation	テクストの生成と変容. 2008, p. 116-126
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47716
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

開かれたテクストへ

——刊本『文反古』への変容——

飯倉洋一

一　閉ざされたテクストから開かれたテクストへ

秋成の『雨月物語』の草稿は発見されていない。また秋成自身が『雨月物語』に言及した記録もない。入木の痕跡は報告されている（中村幸彦「解説」、日本古典文学大系56『上田秋成集』岩波書店一九五九年。高木元「読本の校合——板本の象嵌跡——」『江戸読本の研究——十九世紀小説様式攷——』ぺりかん社、一九九五年）ものの、本文がどのように変化したかを辿れるような痕跡は残されていない。それゆえ『雨月物語』本文の生成や変容が具体的に問題にされたことはかつて一度もないし、異文論・諸本論が提起されたこともない。

しかし『雨月物語』と並ぶ秋成の代表作である『春雨物語』の研究史においては、異文論・諸本論が、避けては通れないといってもいいほど、つねに大きな問題となってきた。『春雨物語』の現存諸本の中でも論じるべきテクストとして有力なテクストは富岡本と文化五年本である。前者は自筆本であり、後者は転写本である。

『春雨物語』の本文研究の歴史からいえば、最初に知られていたのは富岡鉄斎旧蔵の富岡本であった。自筆ではあったが、しかしそれは完本ではなかった。やがて文化五年本が発見されるに及び、『春雨物語』の全貌が姿をあらわした。しかしそれは転写本であった。それに加えて、富岡本が文化五年本より後に書かれたということは疑われていなかった（文化六年本と呼ばれていた時代もあった）ために、『春雨物語』は、富岡本を優先して本文が作成された。つまり全編が揃っていない富岡本ではあるが、それを底本として、それを文化五年本の本文で補うという混合本文の形をとって、『春雨物語』は主として提供されるようになる（木越治『秋成論』ぺりかん社、一九九五年、第一部の諸論参照）

しかし、そういう本文提供は、トータリティという観点からいえばいかにもいびつであり、秋成の意図を反映しているともいえない。そこで転写本ではあるが、三本が存在し、完本である文化五年本の再評価が行われることになる（木越治の前掲書参照）。さらには、時期的にも文化五年本こそが最終的な『春雨物語』の形であり、それは刊行さえ予定されたという可能性を示唆する論（長島弘明『『春雨物語』の自筆本と転写本』『秋成研究』東京大学出版会、二〇〇〇年）が出るに及んで、富岡本の評価は大きく後退したかに見えた。

しかし、はたして、文化五年本と富岡本は、その成立の先後を決定し、後に成立した方がよりよいテクストであるという形で論じられるべき関係なのであろうか。私見では文化五年本と富岡本の記述の仕方、あるいは語り方は根本的に異なるように思われる。それを少しでも可視的に明らかにしようと筆者は試みた。その結果、富岡本が語りを露出するテクストであり、その語りも二重性を持つことが明らかになったと思う（飯倉洋一『秋成考』第三章「『春雨物語』の可能性」、翰林書房、二〇〇五年）。そして、まさにその点に富岡本の特徴と魅力とがあることを指摘してきた。

そのような本文の検討から言えることは、文化五年本と富岡本はたしかに、

いずれかが先に書かれたテクストであることは間違いないが、それが例えば推敲という言葉で説明できるような、直線上に置かれるテクストではないということである。それは秋成の発想の中にある物語がふたつに分岐して成り立ったテクストとでもいえばよかろうか。

雅文学の場合、刊本と写本の関係は、前者が決定版ではないことが少なくない。むしろ清書された写本の方が、刊本よりも価値があるとする考え方が支配的だろう。文化五年本が転写本である以上、どのような形でそのオリジナルが書かれたのかは不明である（おそらくは巻子本であろうという推測が前掲長島論文にある）。しかし、当初からおそらくは巻子本装丁を前提として書かれた富岡本は、その紙質、文字の大きさ、字配りから見ても、清書された秋成自筆本であり、それがただ一人の誰かのために書かれたものであったとしても、その雅文学としての価値の高さは否定できないだろう。富岡本という原物に触れたことのある者にとって、原本で読むことと、秋成全集に翻字された活字で読むことは、全くの別体験であると言っても過言ではない。富岡本は、一面では墨の香りを楽しみつつ味わう書芸術であり、一面では紙を巻きながら姿勢を正して読む雅文学である。そのようなテクストと、もとは巻子本であったとしても現状では冊子本でしか残っていない転写本の文化五年本を、同じ俎上で比較すること自体、一面的であることを承知で言えば、何かを置き忘れた議論だということである。そもそも、富岡本とは、判読することすら容易ではないテクストであり、それを読むことのできる人はすでに選ばれた人である。そのように閉ざされたテクストであるがゆえに価値を持つという側面は否定できない。それは、好きな作者の自筆色紙（とりわけ××さん江などと特記された）を宝物のように大切にしている現代人の感性と少しも変わらない。ましてや相当な長さの物語を、ただひとりのために提供されているのだから、それは閉ざされているがゆえに無上の喜びをもたらすテクストだといえるのである。しかし、この議論にこれ以上立ち入るのは別の紙面に譲ろう（拙稿「『春雨物語』の前提」『国語と国文学』二〇〇八年五月号掲載予定）。

作家から与えられる唯一のテクスト。それを所有する喜びを味わうのに最も現実的なのは、当人から自筆の手紙をもらうことであろう。自筆の手紙——それもまた閉ざされたテクストである。しかし、その手紙の所有者が、閉ざされたテクストゆえに表出される作者の本音や一般には知られざる事実などを開いて、作者を知る多くの読者にも味あわせたいと思うのもまた自然の感情である。著名人の書簡の出版とは、閉ざされたテクストが開かれたテクストになることに他ならない。

だが、それが文学者の場合、とりわけ秋成のような江戸後期の歌人・和学者の場合、それは模範的な雅文の手本となり、巧緻な表現を味わうべき文芸作品ともなる。開かれるのはより豊饒な世界なのである。秋成の手紙（来簡）を集成した『文反古』（文化五年刊）は、江戸後期にはいくつか公刊された消息文集の中でも、その内容が秋成の私的感情が露出することもすくなくないこと、秋成周辺の京坂の文人の交友を生き生きと描いていること、その一方で多くの和歌を含む雅文であること、模範文例とも目される月次消息集を二つも含んでいることなど、際立って読みどころの多い内容である。いわば閉ざされたテクストとしての魅力と、開かれたテクストとしての魅力の両方を兼ね備えた消息文である。しかも、オリジナルの書簡は残されていないものの、その姿をとどめていると思われる刊行以前の草稿（天理大学附属天理図書館所蔵『文反古稿（仮題）』が存在し、その推敲の跡を辿ることも出来る。本稿では、閉ざされたテクストが開かれたテクストへと変容する姿をスケッチした報告である。

二　刊本『文反古』とその草稿

『文反古』は、文化五年五月、京吉田四郎右衛門から刊行された。大阪府立中之島図書館所蔵本に従って、その書誌の概要を述べれば、大本二巻二冊。白茶色表紙。雲母刷に大きく蝶を配した図柄。表紙左肩に「文反古　上」「婦美本乎久　下」という題簽。上巻は大沢春作の序一丁、本文三十七丁で五十六通の消息を収める。下巻きは本文二十八丁に三十三通の消息を収め、文化五年二月付の松本柳斎の跋および同年五月付刊記を併せて一丁。毎半葉十行で、消息に先立ち題もしくは前書がある。この体裁は、享和二（一八〇二）年刊の賀茂季鷹『かりの行かひ』によく似ている（図1、図2）。刊本化にあたってテクストを開かれたものにするためには、既存の流通するフォーマットに学ぶことは有効な方法である。

先述したように、この刊本『文反古』に先立って、『文反古』編集のための途中の段階を示していると思われる草稿的な秋成文集『文反古稿』がある。半紙本に近い大本七冊で、一部を除き秋成自筆である。この七冊にはとくに順序を示す数字が付されていないが、現状の順序を並べ替えると、丁付がほぼ連続することとなり、手紙の並べ方も加除があっても、ほぼ刊本通りになる（拙稿「『文反古』の成立—稿本から刊本へ」『秋成考』所収、以下前稿と呼ぶ）。刊本『文反古』の生成を考えるときにもっとも重要なテクストであり、かつて刊本との対応表を作成したことがある。しかしその後、本広域文化表現論講座の授業として、大学院生と『文反古』を読んでいったところ、本報告書に辻村尚子が報告した事例（上23～上26の秋成と蘆庵の消息往来が、別の消息中に記されているものを独立させたものであったということ）が明らかになり（辻村尚子「テクストの生成—『文反古』の場合—」本報告書所収）、対応表についても訂正が必要になったので、改めてここに作表して掲げてみよう（次頁・次々頁）。

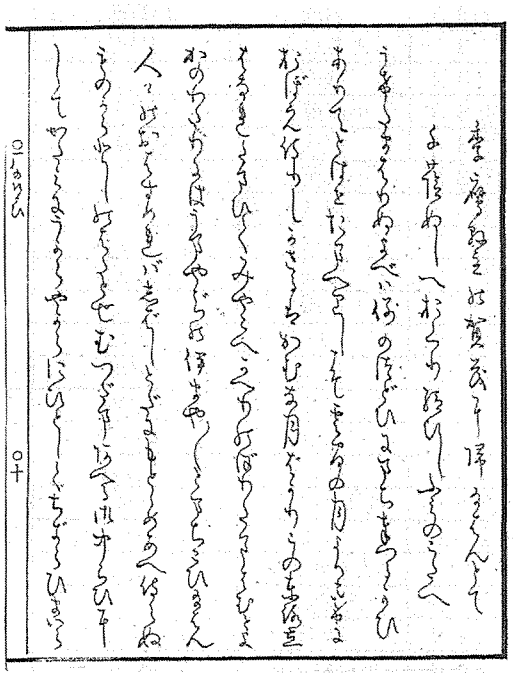

図1　『かりの行かひ』（架蔵）

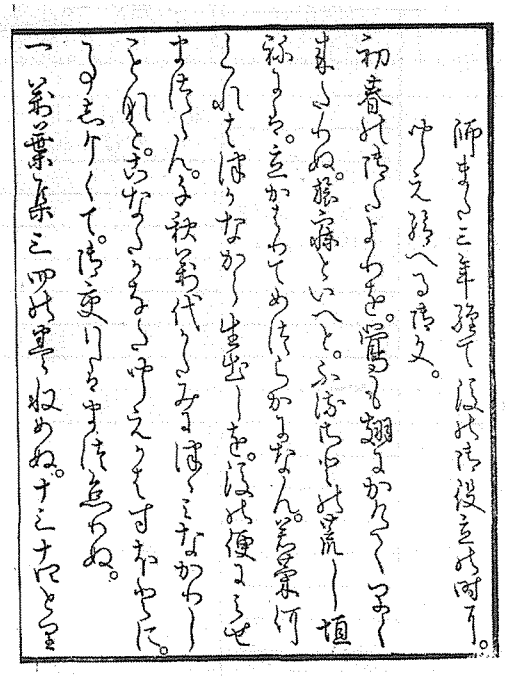

図2　刊本『文反古』（大阪府立中之島図書館蔵）

『文反古』				『文反古稿』	『文反古稿』以外の文献
番号	差出人	受取人	内容	番号	
上１	加藤宇万伎	秋成	加藤宇万伎関係	A1	
上２	鵜殿余野子	加藤宇万伎			
上３	加藤宇万伎	秋成		A２	
上４	加藤宇万伎	秋成			
上５	秋成	加藤宇万伎		A４	
上６	秋成	加藤宇万伎		A５	
上７	八代子	秋成		A６	
上８	秋成	菊屋兵部	本居宣長関係		
上９	秋成	菊屋兵部			
上１０	秋成が人の女に書き与えた月次の文		月次消息	C１０	
上１１				C１１	
上１２				C１２	
上１３				C１３	
上１４				C１４	
上１５				C１５	
上１６				C１６	
上１７				C１７	
上１８				C１８	
上１９				C１９	
上２０				C２０	
上２１				C２１	
上２２	小沢蘆庵	秋成	小沢蘆庵関係		
上２３	秋成	小沢蘆庵		F５７	自筆本六帖詠草44
上２４	小沢蘆庵	秋成			
上２５	小沢蘆庵	秋成			自筆本六帖詠草15
上２６	秋成	小沢蘆庵			
上２７	秋成	小沢蘆庵		D２２	
上２８	小沢蘆庵	秋成		D２５	自筆本六帖詠草31
上２９	秋成	小沢蘆庵		D２６	
上３０	秋成	琴子		D２７	
上３１	あるひと	秋成	作陶関係の贈答		
上３２	秋成	ある人			
上３３	小沢蘆庵	秋成	瑚璉尼に関わるもの		妻を失ひし后河内にゆける記
上３４	秋成	小沢蘆庵			
上３５	小沢蘆庵	秋成		D３０（河内の山里人宛）	
上３６	小沢蘆庵	秋成			
上３７	秋成	小沢蘆庵			
上３８	秋成	小沢蘆庵			
上３９	小沢蘆庵	秋成			
上４０	阿称尼	秋成			
上４１	秋成	阿称尼			
上４２	小沢蘆庵	秋成	小沢蘆庵関係		自筆本六帖詠草９
上４３	秋成	御内の人	正親町三条公則関係	E３５	筆のすさび
上４４	秋成	御内の人		E３６	
上４５	正親町公則	秋成			
上４６	秋成	正親町公則			
上４７	正親町公則	秋成			
上４８	正親町公則	秋成			
上４９	秋成	正親町公則			
上５０	正親町公則	秋成			
上５１	秋成	大沢清規	友人関係	E３７	
上５２	秋成	十時梅厓		E４２	秋成消息文集（家蔵）
上５３	昇道	秋成		E４５	
上５４	秋成	昇道		E４６	
上５５	秋成	実法院院主		E４８	
上５６	秋成	木村兼葭堂		F４９	

下１	秋成	雪岡禅師	友人（季節の推移に従う構成）	Ｆ５０	
下２	秋成	谷直躬		Ｆ５１	
下３	秋成	谷直躬		Ｆ５２	
下４	秋成	長谷川長保妻		Ｆ５４	長谷川女・森川女へ（中之島図書館蔵）
下５	秋成	森川竹窓妻		Ｆ５５	
下６	秋成	滝原豊常		Ｆ５６	
下７	秋成	長谷川長保		**Ｆ５７**	
下８	秋成	長谷川長保妻		Ｆ６３	
下９	秋成	難波の人			
下１０	秋成が手習う人に書き与えた月次の文		月次消息	Ｇ６７	
下１１				Ｇ６８	
下１２				Ｇ６９	
下１３				Ｇ７０	
下１４				Ｇ７１	
下１５				Ｇ７２	
下１６				Ｇ７３	
下１７				Ｇ７４	
下１８				Ｇ７５	
下１９				Ｇ７６	
下２０				Ｇ７７	
下２１				Ｇ７８	
下２２				Ｇ７９	
下２３				Ｇ８０	
下２４				Ｇ８１	
下２５				Ｇ８２	
下２６				Ｇ８３	
下２７				Ｇ８４	
下２８	松本柳斎	秋成	友人関係（生存）		松本柳斎『雪の古道』
下２９	秋成	松本柳斎			
下３０	秋成	某人			
下３１	秋成	大田南畝			秋成文稿
下３２	秋成	森川竹窓		Ｆ６４	
下３３	秋成	松本柳斎			

ただし今回は、刊本『文反古』の書簡が、『文反古稿』からどのように採られたかという点に重点を置いて作表する。また『文反古稿』以外に見える、同内容の和文を収める作品・文献をわかる限り記す。刊本『文反古』と『文反古稿』の番号は、前稿に拠る。『文反古』のアルファベットはそれぞれの冊子に付した記号であり、番号は通し番号である。太字で示したF57は、二箇所に分断して用いられている。

草稿本本文から刊本の本文への変容が、閉ざされたテクストから開かれたテクストへの改稿であるとすれば、それは、おおむね、わかりにくく個別的な人間関係を、わかりやすく一般的な人間関係へと解消する方向へ向かうだろうと、また文章的には、より和文として破たんのない練磨されたものになるだろうと、予想される。だが一方でその改稿は、手紙本来の持つ生々しさを奪い、大人しく模範的なものに落ち着いてしまうのではないかと危惧もされよう。閉ざされたテクストが開かれたテクストに変容する時に、当然のことながら、新たに立ち現れるものと失われるものがあるだろうということである。その実際を次節以下で追い、刊本『文反古』の生成の現場に立ち会いたい。

三　朧化する

別途報告予定の架蔵本『昇道筆秋成消息文集（仮題）』（内容については二〇〇七年十一月十一日、佐賀大学において開催された日本近世文学会秋季大会にて発表済みである）は、『藤簍冊子』編者でかつ版下筆者でもある昇道の手になる秋成消息文集で所収消息八通、そのうち刊本『文反古』および『文反古稿』所収文の異文を一通、『文反古稿』のみに所収文の異文三通を含む。それ以外の四通は新出秋成消息ということになるが、いまここでは触れない。刊本（上52）と稿本（E42）の両方に異文の存在するのは、冒頭の十時梅厓宛消息である。

十時学士におくる

人こぬほどをしばしねむりつるに、物のねの吹おくり来てめざめぬ。あやしさに簾かゝげつれば、み舩よせられたる。上手のてをつくしてふいたまへるには、此ふるやのうつはりの塵のたちまひて、空ゆくゝもゝたゞよひぬべし。そらやけふは、世にひゞきゝこえたる赤壁の遊びありし夕べなり。昔おぼし出て棹はとらせ給ふ覧。軸ともに侍りても御供つかうまつるべきを、ぬるきこゝちの名残して、えしたがひ侍らぬ。いとうらみつべく。ひんがしにほのになるまで簀の子に打かしこまりて聞侍れば、「あやし昔の人かも我は」と心なぐさみつるなり。去年の秋こそ彼いにしへ人の七百六十年になりたまへる（と脱カ）言こと、あづまなる太田のはかせの許より、墨田川に舩うかべて、をかしき遊びせし事を告こされしをさへおぼし出ぬ。いめののこりを又次とはなしに打ねぶりつれば、あやし鶉の毛衣きたる翁の枕をおどろかしつと思ひしは、時たがひたる老がひが心なりけり。さていづこにか棹はとゞめ給ひけん、月のあかゝりしには、あはれすゝめるなへに、から哥人々つくらせたまふ覧。かたはしだもきかまほしさに、筆かはらせてとひまいらす。酔ふしたまはゞあすなんつばらに聞えたまへ。

初秋既望夜

稿本と刊本はほぼ同じ。ここは稿本の文章をあげておこう。

故さとに、月をわたりて在ほど、十時梅厓におくる

人々こぬほど、しばしねむりつるに、物のねの吹おくり来てめざめぬ。あやしさに簾かゝげつれば、御舩よせられたる。上手の手を残さずふいたまへるには、此古屋の梁の塵のたちまひつゝ、水に影見る雲もたゞよひぬと

ぞ見る。そらやけふは、世に響聞えたる、赤壁の遊び有し夕べなり。昔おぼし出て棹はとらせたまふ覧。軸ともに侍りても御供つかうまつるべきを、ぬるきこゝちの名残して、えしたがひ侍らず。ひんがしにほのになるまで簀の子に打かしこまりては、「昔の人かも我は」とあやしう心なぐさみて侍る。去年の秋こそ彼いにしへ人の七百六十年に成ぬとか聞くには、いよゝ身にしみておぼゆ。さていづこにか棹はとゞめさせけん。月にあかゝりしには、あはれもすゝめるなめに、人々から哥作らせ給ひなん、かたはし承らばやと、筆代らせて問まゐらす。酔のなごりしてふいたまはゞ、さめて後にかいつけて見せたまへかし。

享和三年に秋成が七十歳の大坂大江橋畔に旅寓の折、梅厓らが赤壁の賦にならって行った船遊びに秋成を誘う。後ろ髪を引かれる思いで断るが、前年秋にやはり「あづま」（江戸）の大田南畝が隅田川で赤壁賦にならった船遊びをしたことを伝えてきた手紙を思い起こしながら、梅厓にそこで出来た漢詩を教えてほしいと頼む。そういう手紙の内容である。

稿本および刊本との大きな違いは、傍線部の部分が稿本および刊本ではなくなるということである。「いとうらみつべく」は「大そう恨んでおいでしょう」の意。「うらみ」という強めの言葉を省いた。「あづまなる」以下の南畝の消息については、『文反古』中に別に南畝の手紙が採られること、この消息のなかではやや逸脱的部分であることから省かれたもの。末尾の「初秋既望夜」は七月十六日という具体的な月日を省く。雅人であれば蘇軾が赤壁賦の詩を作った月日は知っていて当然、ここは言わずもがなだからであろう。ちなみに同じ『秋成消息文集』所収の末尾の大田南畝宛書簡も、「ふん月廿三日」という具体的な日付があるが、『文反古稿』ではなくなっている（該書簡は刊本には収載されなかった）。概していえば、『秋成消息文集』所収文は、元の手紙の雑然とした、また具体的な固有名詞や月日のある限定的内容を色濃く残しているが、稿本の方では刊本化を前提として、限定的内容が朧化して普遍的なものになり、かつ雅文的色彩を強めたということである。これは、特定の相手を対象に書かれた個人的な書簡文を、雅文消息としてのテクストとして開いたということであった。

四　削除する

刊本上56は、上巻の巻軸を飾るにふさわしい木村蒹葭堂宛の書簡である。草稿に相当する『文反古稿』から刊本への変容の中で、特に顕著な「省略」とその意味について述べる。

郷友の蒹葭堂が源順の『和名抄』十巻を得て、現在流布している二十巻本との異同を考勘することを求めてきた。その頃病を得て医者をやめ田舎（淡路庄村）に退隠していた秋成は暇あるままに安請け合いをしたが、病気療養に時間をとられ一年あまり怠っていた。すると蒹葭堂から「早く返してくれ」と催促があったので、日夜集中して考勘を終え、返却するのに添えた手紙であるという内容の前書がある。比較的長い手紙だが、ここでは書き出しの部分のみを掲出する。『文反古稿』の本文である。

此としもやう〳〵暮ぬめり。家こぞりてつゝみなく、春を迎へ給はん事、あかぬためしの喜びをことほぎたいまつる。わづらひの神は、にぎはしきをこそうかゞふものにおぼえしを、我藪くさ深きかくれ家をしてやどりもとめ来たるには、是とあらそふやうにてなん在事よ。『和名抄』の事承りぬ。病のひま〳〵によみあはせんとする〳〵、月をわたりぬるこそなめしわざなれ。此頃の御便にせめ聞えらるゝかと見れば、あらで、たゞとく返すべ

くうけ給はるこそ、思ふにたがひぬれ。此ふみおのれかり求しにはあらず。そなたの乞給てこゝにはもたせこされしにあらずや。しかすがに蔵めしふみのつらにはおぼすべからねば、常にも近き机の上棚の端に置て、塵いさゝかもすゑじと物せし也。此せめきこえ給ふにつきてぞ、万を打やめ、病をもいたはらず、夜ひるにて、おろそげながら事をへぬ。今はこゝにもしるしとゞめしかば、御もとめつぐなひぬ。猶一わたりなるものから。

次は刊本『文反古』の対応部分である。

年もやう〳〵暮ぬめり。家こぞりてつゝみなく、春をむかへたまはんこと、あかぬためしにことほぎ申す。わづらひの神は、賑はしきあたりは窺はぬものか。『和名抄』の事打もおかねど、病のひま〳〵にて、月をわたりぬる事、なめしわざにやおぼすらん。今はよろづをうちやめてつとめてん。今しばしも。「年の内に」とおぼし立ぬ。

稿本の傍線部が大幅に削除されている。削除された傍線部は次のような意味だろう。

この頃のお便りに「まだですか」とお責めになるかと思いますと、そうではなく、ただ早く返すようにということを承ったのは、意外なことでした。この本は私の方からお借りしたのではありません。あなたが私にお願いするということで、私の処に持たせて来たものではなかったでしょうか。私の方では、私の蔵書と同列にするようなものでもないですから、いつも近くの机の上の棚の端に置いて、塵が積もらないように気をつけていたのです。このようにお責めになるので、全てを中止して、病気療養もせず、夜も昼もこれにかかって、雑ではありますがようやく終わりました。

と、兼葭堂の態度にむっとした気持ちを隠さないで述べている。刊本ではここが全て削除されて穏便な内容になっている。稿本の本文は、気の置けない秋成と兼葭堂の関係だからこそ許されるともいえる文面だが、さすがに二人の関係をよく知らない人々の間（版元は京都）で読まれることが予想される刊本に、これをそのまま載せるのは憚られたのであろう。まして兼葭堂は故人である。故人追悼の意図を濃厚に反映する刊本『文反古』では省略されるべき内容であった。

五　推敲する

秋成は自分の手紙だけではなく、自分宛ての手紙にも手を入れている。驚くべきことに、師の加藤宇万伎の手紙にも大幅な推敲を行っている。このことについては既に前稿に述べたことがあるが、比較の形で掲出してはいないので、あらためて論じる。刊本『文反古』上巻の三つめ、「師また三年経て後の御役立の時に、聞え給へる御文」と題する消息の前半部分（図2の影印参照）。『文反古稿』では、「師の文どもいと多かりしを、乞にあたへて今あらず。此二三章も都なにはの人のもとにてこたび写とらせし也」とあり、大坂の知人のもとにあった宇万伎の文を写させたものだという。その前半部分を示して秋成の推敲のあり方を見てみよう。推敲場所は番号を付し、傍線を引いて示す。②は削除されただけ。

初春の御たよりを、鶯も翅にかけてはやく来たりぬ。たび寐といへど、ふる郷の荒し垣ねには、①いとかはりてめづらかになん。②古革まじりた

れど、若菜何くれはつかながら③おひ出たる、後の便に④見せたてまつ覧。千秋よろづ代かたみにつつみなかりし事など、⑤かうしきくに聞えかはし侍る。御交り⑥には先おきぬべし。

（『文反古稿』）

初春の御たよりを、鶯も翅にかけて早く来たりぬ。旅寝といへど、ふるさとの荒し垣ねには、①立かはりてめづらかになん。②若菜何くれはつかながら③生出しを、後の便に④みせまつらん。千秋万代かたみにつゝみなかりしことなど、⑤こなたかなた聞えかはすほどに、事しげくて、御交り⑥はまづ怠りぬ。

（刊本『文反古』）

師の文章を添削するとはどういうことだろう。宇万伎関係の手紙は『文反古』冒頭に七つ連続して置かれていて、宇万伎が秋成にとって最も大切な人であったことを示している。添削は宇万伎を顕彰するためでこそあれ、それ以外ではないだろう（本報告書所載、特別研究会「秋成—テクストの生成と変容—」における辻村尚子「テクストの生成—『文反古』とその周辺」発表後の討論において同趣旨の発言があった）。②の「古草まじりたれど」の削除は、「若菜」を後便で送るのに、よりきれいに見せる細工であり、①「いとかはりて」→「立かはりて」、③「おひ出たる」→「生出しを」、④「見せたてまつ覧」→「みせまつらん」は、わずかな語感の違いではあるが、こなれている感じである。⑤「かうしきくに聞えかはし侍る」→「こなたこなた聞こえかはすほどに、事しげくて」はわかりやすくなっているし、⑥「にはおきぬべし」→「はまづ怠りぬ」は、謝意が現われる。とはいえ、いずれも微妙な改変である。秋成の繊細な態度が浮かびあがってくる。その推敲内容は、すべて表現に関わるレベルであり、個人的事情を省略したり、公刊を憚る部分を削除するという類ではない。

もうひとつの例は松本柳斎の手紙である。『文反古』下に柳斎と秋成との往復書簡が収まっている。内容は概要は次のようなものである。

小澤蘆庵の下で友誼を交わしたのち無沙汰していた柳斎だが、最近は秋成の万葉集論談を有りがたく聴いていた。一日も怠りなくと思っていたが、急に故郷から使いが来て帰郷しなければならなくなった（飯倉注。後述するように柳斎の母の病気という事情である）。秋成に忘れ貝の片方を贈って別れを告げ、すぐに帰ってきますという。それに対して秋成は、珍しいものを賜り感謝する。齢の限り弄び、昔の人の下紐に忘れ草を結っていた例に倣って、常に腰に挟んでおきましょう。早く都へお帰り下さい、と答える。

この往復消息は『文反古稿』には収められていないが、松本柳斎自筆紀行の『雪之不流道・心能友』にこの往復書簡が書きとどめられている。同書は長島弘明「秋成と松本柳斎」（『日本文学』二〇〇六年十月号）においてはじめて紹介されたが、長島は「この二通の手紙を」『文反古』所収のものとそれぞれに比較してみると、秋成の返書は漢字ひらがなの異同以外はごくわずかな相違しかないのに対し、柳斎の手紙はかなり推敲されている」という。同論文によって、『雪之不流道・心能友』所収の柳斎の手紙を掲げる。なお同論文引用の注記にしたがい、誤記と思われる箇所を正し、また柳斎の訂正があれば訂正後の本文を示し、誤記と思われる箇所を正して引用する。

上田秋成翁に忘貝をまいらすとて

①身まかりし小澤うしのもとにても、かつまみえしをぢのみもとちかくとひまつりに、わきてさいつころよりよろづはの哥のあげつらひなどをもうけたまはれば、ひとひもさりがたく思ひ給ふめるに、②玉藻よきさぬきにはべる老たる母のやまひ、せちに苦しげなりとて、とみにむかふる人いれたり。これもまた、さりえぬことなめれば、ひなの長ぢにたち出るにな

ん。

わかれても忘ぬきみにわすれ貝③かたつもたるを奉るなり

これはいにしころ、仰ごとありし忘貝なり。かゝる物このめる網浦の漁翁のめぐまれしは、さきにきこえまつりぬ。こたびもよろしきをひろげなば、ふところにしてかへりまうでん。あなかしこ。

柳斎が、忘貝にそへて。

①過たまひし師のもとにて、かつ〳〵御まのあたりせしのちは、おもひながらうときものに侍りしを、ちかきころ御いほりに時々問まつりて、何くれのことども承るなへに、よろつ葉のうたのあげつらひこそ、ことにありがたく、一日もをこたらじとおもふたまへりしに、②とみにふるさとの使来りて、あすなむ出たつ。いともほいなきものから、

わかれてもわすれぬ君にわすれがひ、③もたるかたしを先奉る。

さきにうけ給はりてはべれば、これはある網の浦のむら君のたびつるなれば、こたびはかならずとりよろひて、奉らむとおもふたまへるなり。やがてかへりてなむ。

趣旨は変わらないのだが、ほぼ全面的に書き換えている。秋成だけではなく柳斎の手も入っているだろうが、本稿は、草稿から刊本へというテクストの変容を論じる場であるので、誰が推敲したかというよりも、いかに推敲したかを問題にしたい。とくに番号を付したところについて述べる。①②は、具体的な人名（蘆庵）や国名（讃岐）、そして帰国の理由（母の病気）を朧化して、情報中心の文から、雅趣を重んじる文へと推敲しているといえよう。①の推敲の結果「過ぎたまひし」と「御まのあたりせし」が対照的になるような工夫がなされている。②についていえば、急な帰省の理由を省略して表現を切り詰め、むしろ「とみに」「来たりて」「あすなむ出たつ」という簡潔な言い方で切迫した状況を暗示する。③は、和歌の添削である。「かたつもたる」のこなれない表現から「もたるかたし」への改変。そして「奉るなり」から「先（まづ）奉る」と改変、「先ず」を入れることで、「今回は片方の貝殻だが、次は両方の貝を差し上げましょう」という本文の趣意に合致する歌に推敲している。推敲前であれば、このわすれ貝が永遠の別れのかたみになるという内容になってしまうところであろう。

おわりに

以上いくつかの例をあげたが、稿本所収本文から刊本所収本文への変容においては、「テクストが開かれる」という点において同じ方向性をもつということが確認できたように思う。本書の跋文において松本柳斎が、「うひまなびのために、木にゑらせんと」したというように、初学者に模範的な和文を提供するという側面があるから、これは当然といえば当然である。しかし刊本本文が、初学者の消息文入門にふさわしいものになっているかといえば、それは否である。秋成の古稀記念歌文集『藤簍冊子』の姉妹編である本書の意義は、第一義的には秋成の日常を引き出し、私的な俗事をいかに和文で示すかという点にあった。つまり、秋成の私的生活が覗けるという点にこそ本書の魅力があるはずなのである。そういう魅力を残すには、消息に「秋成らしさ」がなければならない。そういう面から見れば、「テクストを開く」ことは、秋成の「私」性を隠蔽することになってしまい逆効果である。しかしながら、出版すること自体に倫理性・公共性・実用性が帯びるとされる近世にあっては、私的交友の具体的内容の全面的な公開は、やはりさまざまな問題が伴う。『文反古』における稿本から刊本への変容を追ってゆくと、そういう問題を回避しつつテクストが開かれていく

ケースが多いのである。

だが、それにもかかわらず、結果として本書が秋成の伝記資料によく用いられていることからも明らかなように、消息の出版は「私」性を大きなセールスポイントにしていることは疑いないのである。したがってテクストの開かれ方も、ある時は微妙である。「私」と「公」の綱引きのような緊張感をこそ、読者は楽しむべきなのかもしれない。

【補記1】本論に関連するものとして本文中にあげた旧稿のほか、拙稿「秋成和文の生成—『文反古』を中心に—」（飯倉洋一・木越治編『秋成文学の生成』森話社、二〇〇八年）がある。参照していただければ幸いである。

【補記2】影印の掲載をご許可いただいた大阪府立中之島図書館に深謝申し上げる。